

「親ガチャ」言説と若者の生きづらさ
—テキストマイニングによる当事者の声の可視化—

○ 駒澤大学大学院博士後期課程 安 然 (010260)

荒井 浩道 (駒澤大学・5909)

キーワード: 「親ガチャ」, 当事者の声, テキストマイニング

1. 研究目的

現在, 自殺の実態について, 経済協力開発機構 (OECD) により, 日本の自殺死亡率は 16.1 となり, 韓国, ハンガリーに次いで, 世界で 3 番目に高い水準となっている. 警察庁の統計 (2024 年) では, 学生・生徒等の自殺者数は増加し, とくに, 小中高生の自殺者数は 529 人と過去最多を記録した.

死を選ぶ若者の増加は, 「生きづらさ」という感覚が社会に広がっていることの表れとも捉えられる. 貧困, 障害などといった従来から社会問題として認識されてきた「絶対的生きづらさ」だけではなく, 社会からの期待と現実のギャップによって生じる「相対的生きづらさ」も重要な視点として捉える必要がある. 「相対的生きづらさ」は精神疾患や反社会的行動, 自殺など, 深刻な問題の引き金となっている事例も少なくない (原・根本 2024). そのため, 「誰も自殺に追い込まれることのない社会」の実現に向けて, 可視化されにくい「相対的生きづらさ」も, 支援の対象として捉える視点が今後ますます求められる.

若者は SNS などの匿名性のある場を通じて, 自らの思いや困難といった内面を自由に語る傾向がある (二宮・松本 2018). そのような語りの一つとして, 本研究は, 2021 年の流行語大賞に選ばれた「親ガチャ」という表現に注目する. 「親ガチャ」についての研究はあまり蓄積されておらず, 主に遺伝の視点 (安藤 2024), 社会学の視点 (吉田 2022), および「親ガチャ」言説に対する社会の反応を分析対象とした研究 (小西 2023) などがある.

本研究は, 「親ガチャ」という若者の言説を通して, その背後に隠されている生きづらさ語りの実態を明らかにすることを目的とする.

2. 研究の視点および方法

本研究は, ソーシャルワークの視点から, 既存の支援の枠組みからこぼれ落ちてしまう「相対的生きづらさ」を抱える若者の声に注目するものである. 「親ガチャ」という言説を単なる流行語やスラングにとどまらず, 当事者の思いや語りに潜むニーズや困難を紐解く手がかりとして捉える.

本研究では, 匿名性が高く, 気軽に投稿できる SNS として日本国内でも広く利用されている X (旧 Twitter) を対象に, 2025 年 1 月から 2025 年 7 月までの半年間に投稿された「親ガチャ」に関する若者の投稿を収集し, KH Coder 3 を用いて分析を行った. 分析手法としては, 以下の 3 点を中心に進めた. ①データの全体像を把握するため, 上位頻出語を抽出した. ②共起ネットワーク分析を行い, 「親ガチャ」にどのような社会的要因が潜んでいる

かを読み取った。③対応分析を行い、特徴語を抽出した。

3. 倫理的配慮

本研究において分析対象とした X 上の投稿は、公開情報であり、個人情報に関わる倫理的問題は生じない。著作権法の第 30 条の 4、第 47 条の 5、第 32 条の各条項にもとづき、情報解析を目的とし、必要と認められる範囲に限定して利用した。X 社の「著作権に関するポリシー」、および「フェアユースポリシー」における「変容的かつ非営利的な利用」に該当する。

本研究は、日本社会福祉学会「研究倫理規定」および「研究倫理規程にもとづく研究ガイドライン」を遵守した。本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等は存在しない。

4. 研究結果

本研究では、X における「親ガチャ」に関する若者の投稿（n=1583 件）を対象に、頻度分析、共起ネットワーク分析、対応分析を実施した。

頻度分析では、「失敗」「人生」「成功」「子ガチャ」「環境」「努力」などの語彙が上位に確認された。共起ネットワーク分析では、「親ガチャ」が「才能」「遺伝」「努力」「環境」と密接に関連し、また「性格」「顔」「可愛い」などの外見に関する語がまとまりを形成していた。対応分析の結果、「親ガチャ」を中心として複数の語群が形成され、「殺す」「死ぬ」「かわいそう」などが近接して配置された一方、「運」「要素」「全て」「決める」などは対照的な位置にあり、語の使われ方に構造的な差異が見られた。

5. 考察

本研究では、「親ガチャ」という言葉に着目し、若者が抱える悩みや困難について考える手がかりを得ることを試みた。投稿に見られる「親ガチャ」の使われ方には、努力、環境、外見といったテーマとともに、自身の状況を語るための戦略的なレトリックとしての側面も見受けられた。社会に共有されにくい悩みに耳を傾けることで、十分に把握しきれていない若者の困難を明らかにし、支援の在り方を再考する視点を提示するものである。

（文献）

安藤寿康（2024）『『親ガチャ』時代のキャリア選択と支援』『産業ストレス研究』31(4), 289-297.

原広司・根本裕太郎・永吉真子・奥村春香（2024）「若者の生きづらさの概念化に向けた一考察」『横浜市立大学論叢』76(1), 1-17.

小西凌（2023）「流行語『親ガチャ』をインターネットコメントはどのように捉えているか 貧困若年女性を取り上げた事例記事に寄せられたコメントの分析」『東海社会学会年報』15, 67-80.

二宮有輝・松本真理子（2018）「抑うつ症状を伴う青年における SNS 上の特徴に関する検討—テキストマイニングによる投稿内容の分析を中心とした探索的検討—」『児童青年精神医学とその近接領域』59(5), 597-613.

吉田邦夫（2022）「コラム 親ガチャ」国際 P2M 学会『P2M マガジン』14, 80-81.